連携先世界遺産：比叡山延暦寺
「お山」の魅力を探る・伝える

古くから比叡山に伝わる千日回峰行が、京都の人々によってどのように支えられているかを取材し、短編の映像作品として紹介する。

■受講生

五十嵐 希（同志社女子大学・現代社会学部・３年生）、伊藤 晋之介（京都文教大学・臨床心理学部・３年生）、伊藤 すずか（京都文教大学・総合社会学部・３年生）、奥 千代丸（京都文教大学・総合社会学部・３年生）、四方 裕子（京都文教大学大学院・臨床心理学研究科・２年生）、徳田 雄太朗（龍谷大学・文学部・２年生）、 橋本 依果（京都文教大学・総合社会学部・３年）、平松 卓也（立命館大学・経済学部・４年生）

■担当教員

手嶋英貴（京都文教大学・総合社会学部・教授）

活動目的・概要

京都ではむかしから、たんに「お山」といえば比叡山のことをさすほど、その存在は都のひとびとにとって近しいものでした。法然や親鸞、栄西、道元、日蓮など、こんにちの仏教宗派の祖師たちが若き日に学んだことで「日本仏教の母山」ともよばれています。この授業では、比叡山延暦寺より提示される課題をうけて、お山がもつ魅力を現代の大学生ならではの視点から探っていきます。

今回は、比叡山の伝統的な修行の一つ「千日回峰行」のうち、800日台に行われる「大廻り」を陰で支えている京都の人々に光をあて、広く知られてこなかった「京とお山のつながり」を示す映像作品を作ることになりました。支え手の代表例として、息障講という信者組織の歴史や現在、そして修行を実際にはどうの支えておられるかを調査しました。また大廻りの最中、行者に宿所を提供するお寺・清浄華院にもインタビュー取材を行いました。そしてその成果を、約８分の映像ドキュメンタリー作品「千日回峰行を支える京の人々」として具現化しました。

◆主な活動

2017.5.13 インタビュートレーニング講座
2017.5.28 全体オリエンテーション
比叡山延暦寺と回峰行に関する学習
2017.6.10 京都大廻りの現地学習（清水寺、北野天満宮ほか）
2017.6.11 延暦寺での現地学習（無動寺谷ほか）
2017.6.24 京都大廻り取材・撮影（赤山禅院、清水寺、清浄華院ほか）
2017.7.8 息障講に関する取材（伏見区深草）
2017.7.15 取材情報の共有と作品制作打ち合わせ
2017.7.22 京都文教大学における成果中間発表
2017.10月～11月 作品制作（自主活動）
2017.12.10 最終成果発表

活動の成果

ドキュメンタリー映像「千日回峰行を支える京の人びと」あらすじ

日本語にまじって、英語や中国語が聞こえてくる、国際都市・京都の日常の風景です。その賑わいの中、変わった装束を身に付けた人びとがやってきました。

丸い一文字笠に袴をはいた人、そしてお坊さんも。さらに、細長いお笠をつけ、杖をもった白装束の人があらわれました。遠い昔から比叡山に伝わる千日回峰行の行者さんです。今日は、この回峰行者さんを支える人たちに、光をあててみましょう。

回峰行は行者さんだけでなく、その周りでお世話をする人びとに支えられ、現代に受けつがれてきました。一文字笠をつけているのは「息障講」の人です。息障講は、回峰行者の本拠地である比叡山の無動寺谷、明王堂の信者組織。ふだん町に暮らしながら、回峰行のお手伝いをしています。行者さんを先導し、道の安全を確保することも、息障講の仕事です。講員たちは、仕事の都合をつけながら、その役目を毎日、交代で果たしています。

京都御所の隣にある、浄土宗のお寺・清浄華院。大廻りの期間、回峰行者の宿所になっています。このお寺では、行者さんの世話を担当されている松田さんにお話を伺いました。

回峰行は天台宗の修行ですが、宗派は違っても、世の人々の心を安らかにしたいという願いは共通している――そんな思いを持って、行者さんに接しておられるそうです。

夕暮れ時、大廻りを終えて、行者さんが清浄華院に到着します。息障講の人たちの先導もここまで。疲れを見せることなく、今日も役目を果たしました。
かつては、西陣あたりの商人や職人が多かったという息障講。しかし、会社勤めの人が増え、大廻りの仕事を引き受けられる講員が少なくなりました。近年は、全国から講員を募集するなど、組織に新たな風を吹き込んでいます。時代に合わせ、しかし時代に流されることなく、京都の伝統を守っている人々がいます。

活動を振り返って

・活動を通して学んだこと（期末ふりかえりアンケートより）
「本当のことを知るために相手の話をしっかり聞くように努めた。また、一緒に活動し課題に取り組む仲間の力を信じる気持ちを持つことが出来た」
「比叡山延暦寺と京都の社寺が関係している千日回峰行について知ることが出来た。京都のいくつかのお寺を回り、知識を得たことで多くの人に紹介したいと思った」
「物事に取り組む姿勢と、創造力が身についた」

担当教員からのコメント

京都文教大学では春学期科目として開講されているため、事前学習や取材活動を終えた段階で授業自体は終ります。そこで、プロジェクトの中核部分である映像作品の制作は、授業終了後に自主活動として行う段取りとなりました。

プロジェクトの前半にあたる事前学習・調査については、ほぼ問題なく進行したと言えます。千日回峰行の現場を訪問して周囲の方々の活動を観察し、また比叡山上では行者の本坊地域をたずね、ふだんは静かな環境の中で修行がされていることを学びました。その上で京都市内の社寺（赤山禅院、清水寺、清浄華院など）で取材を遂行しました。これらの活動により、学生たちは比叡山という存在が京都の精神文化とどんな繋がりを持つかにつき、具体的に理解したと思われます。

ただ、それに基づく成果物を作るプロセスでは、複数の大学に分散している履修生たちが再び集まって作業をすることは難しく、教員が中継点になって各学生に分担作業を割り振る形になりました。その分、作品制作のプロセスでチームとしてのつながりは薄れざるを得なかった点で、教員としては授業構成に課題を残したと感じます。そうした中で、作品の方向性を主体的に提案し、かつ自分の仕事をしっかりと果たしてくれた学生たちには拍手を送りたいと思います。

活動資料

息障講の歴史と現在に関する取材の成果

息障講野々村氏インタビュー

歴史は?

正確には、不明である。恐らくは、西陣当たりの富裕層の旦那衆が先導をかって出たのが発端ではないか?

息障講の役目は?

さまざまである。まず切り廻り、大廻りの際の警固。次に、千日行者の八千枚護摩供などの受付、葛川安居の随喜など。先導は、男性が行う。女性陣は、特に護摩供の際の接待などで活躍。

講員は?

現在70名。かつては50名ほどに減少するも、近年新たに加入する人もいる。講の年齢層は中高年が多い。昔は、三代続けて息障講に参加せねば正式な講員とは認められなかった。

九州や関東など幅広く講員がいる。現在では、自らの縁により講員になる者がほとんど。

講社長はどのような人がなるのか?

本来は年功序列であるようである。

※今の講社長の例。しかし、行者が指名する場合もある。講長は、千日行者だけでなく先の千日行者や他の叡山の僧侶とも面識がある方が望ましいとされる。前の講社長との引継ぎなどは行われない。

講員の装束について

白を基調としたぶっさき羽織に縞袴、丸笠に、手甲脚絆を装着する。息障講独特のものでありすべて、特注である。特に、袴は小倉袴に近い道着のような厚手のものであり、生地を自前で入手し仕立てさせる。近年では、縫子の減少や特殊なものである為仕立てを依頼するのが困難となっている。

装束自体も、非常に着にくい不便なものである。

息障講の現状と課題

古来は、世襲のような形で引き継がれてきた息障講であるが昨今の情勢変化に伴い自らの縁で加入する。また、人伝てに紹介されてきたものである為縁によるところが大きい。光永阿師の頃に、無動寺谷の信者に講の案内を出すなど僅かではあるが周知が図られつつある。

先導役は、行者のペースや道順などを心得ておかねばならない。しかし、現状では先導役が出来るものは二名しかおらず早急な養成が必要である。

切り廻り、大廻り等は一日中歩き続けるため、一定期間警固して随行することは一般の勤め人には時間的制約があるため養成の障壁の一つとなっていると考えられる。

また、息障講の装束の仕立てについても課題がある。

龍谷大学文学部歴史科仏教史専攻　徳田雄太朗